「金魚と氷と祭囃子」

2009/08/31

目の前の景色が熱でゆらゆら揺れてる気がして目を細めた。
空気も揺らぐくらいの熱気の向こう、遠いところに、誰かいる。
それが誰なのか、何となくわかっていながら暑さにげんなりして、特に急ぐことなくふらふら歩く。

「なんだよもう！　待たせるなよほら、走れ走れ！！」
「うるさいですよ暑苦しい」

随分と元気にはしゃぎまわるいい年した青ジャージにビンタをくれてやって、違和感。

「あれ、太子汗かいてませんね」

いつもは春先だってあんなにぬるぬるしてるくせに、と言うと怒るかと思いきや、得意げに胸を張られてしまった。これはこれでムカつく。

「ふふん、私を誰と心得る！　なんとこの夏から汗を意図的に止める技を習得したんだ！」
「う、ウワァー、ぎりぎり人間技っぽいのと役に立ってそうなところがまたムカつきますねそれ」
「いやだから褒めろってお前人の話聞いてるのか？」
「太子こそよく僕の話聞いてください。褒めてるじゃないですかちゃんと。ムカつくって」

「……あづ」

ため息も熱い気がして嫌になる、今日も今日とてどうしようもなく暑い夏の一日だ。
どこを見渡しても逃げ場のない辛い日差しの下で、足元の影の濃さにもうんざりできる。
日陰を探したいんだけどあいにく何も見つからないし。
って言うかなんで僕ここにいるんだろ。
暑さで朦朧としてくる、背中をだらだらと汗が流れて気持ち悪いけどどうしようもないし。
額の汗をぬぐったら、素肌だったから無意味に塗り広げただけになってがっかりした。
なんでこのジャージには袖がないんだよ。
手ぬぐいでも持つべきだった、と今さら後悔したってしょうがないし。

「それ褒め言葉じゃない！」
「逆に褒めてるんですよ、ほら、貶めることで逆に……」
「ああ。逆に。……っていま貶めるって言わなかったかお前」
「気のせいでしょう」

そんな馬鹿な話してる間にも汗が止まらなくて、僕は素直に回れ右をして太子に背を向ける。

「じゃあ僕帰りますんで」
「なんで！？　来たばっかじゃん！」
「いや暑いんで。僕太子みたいに汗の調節とかできないし、そういえばなんでわざわざ太子に会いに来たのかよくわからなくなってきたんで」
「お祭りがあるからいっしょに行こうって言ったじゃん！　なにこれぬか喜び！？　ここまで来たのに帰るなよ！」
「祭り？」

そういえば、そんな話をしたような、しなかったような。

「手紙だって出したし！」
「えーそんなものもらってないですよー。……あ、あった」
「あるじゃないか！」

ジャージのポケットから丁寧に折りたたまれた手紙が出てきてしまった。なんでこんなもの大事にポケットに入れておいたんだよ僕。だったらせめて手ぬぐいとか、もっと必要なものはあるだろう僕。

「じゃ、行こう！」

太子が手を握ってきた。
振り払わなかったのは僕よりも涼しい手のひらだったからだ。
まあ変な特技を習得したとかで汗もかかないようだし、若干男二人手を繋いでいるというこの図が気持ち悪いというだけで他に害はなさそうだ。
縁日楽しみだなー、とか言いながら太子が手を引いてぐいぐい歩き出す。
縁日ってなんだろうとかぼんやり思いながら、僕は太子に連れられていく。

「何お前縁日知らないの？　楽しいぞー。ちなみに縁日ってこんなんだ」
「説明めんどくさがんないでくださいよ」

川沿いの道だった。道の両側に簡単な作りの店のようなものがずらりと並んでいた。
川のおかげか、反対側に一定間隔ごとに生えている木のおかげか、随分と涼しくて心地のよい場所だった。
ただし人はそこそこ多い。道幅がそれなりにあるのでひどく混んでいるという印象はないけど。
混んでいる、というよりはにぎわっているといった感じで、何だかそわそわと落ち着かない気分だ。

「縁日ってこんなんだよ、ほら、いろいろお店あるだろ。食べ物とか遊びとかさ、結構先までずっと続いてるから見てまわろう」
「そういえばあと、お祭りって言うのは？」
「それは日が暮れてから、このずっと先でみんなで踊るの。御囃子とかって聞くとなんかわくわくするよな！」
「……ああ」

そうですね、と笑った。
そわそわしてるよりも僕はわくわくしているんだ。
何だか、何もかもが面白そうに見えてくる。
ぎゅ、と太子が握った手を胸のあたりまで引き上げた。

「で、見てわかるとおり人多いから、はぐれないようにお前はずっと私の手を握ってなきゃだめなんだぞ！」

なんだか子供みたいだなと思いつつ、まあ似たようなもんだと頷いた。
はぐれて、探し回るのはきっと僕の役目だ。
できればそんな面倒な事態は避けたい。

「まずは金魚すくいからー！」
「うわ、まてバカ太子、走るな！！」

わくわくとした穏やかな気分は一瞬で吹き飛んだ。
人が多いって言ったのはどこのどいつだ！
まるで人ごみを無視する動きで走り出されて僕はぶつからないように避けるのと、太子に引きずられて転びそうになるのを堪えるので必死だった。

「殺す気か」
「ごめんなひゃい」

金魚すくい、の文字を掲げる屋台を通り越して走ろうとしたから、全力で踏みとどまって腕を引いた。
そのままゴムのおもちゃのように戻ってきた太子の体を地

面に叩きつけてすごんでおいた。
僕がどれくらい気を使って人を、特に子供を避けてきたと思ってんだこのバカは。
泣かれたらどうするんだ。泣くぞ、僕が。
「へーお前子供にやさしいのな！　それとも逆に苦手だったりするのか？」
「……」
「おじさーん、金魚すくい一回！」

凄んだらこいつ無視しやがった。
ともあれ太子は店の人から丸い紙が貼ってあるものを受け取って、同じ手で水に浮いているおわんを引き寄せた。
どうやらこれは水の中で泳ぐ魚をその丸いもので取るという遊びらしい。そして取れるともらえるらしい。
他のお客さんがやってるのを見てようやくわかった。
太子はしゃがみこんで、左手に丸いものを構えて真剣に水を睨んでいる。
「手、はなしましょうか」

なんで左手、と思って右手を僕と繋いでいたことにようやく気付いた。
よく見ると他の人は丸いものを持って、逆の手におわんを構えている。
きっとあの姿勢が正しいのだ。
「いや、いいよ。はぐれたくないし」
「はぐれないでしょう、こんなところで」
「いやわからんぞ、お芋がころころ転がって……」
「それは、あんただ！」

いっしょにとなりにしゃがみこんで、脳天にチョップをくれてやった。
「じゃあお前おわん持ってろよ。見てろー、こう見えても私うまいんだぞ金魚すくい！　なんたって勝手に金魚のほうから飛び込んでくるからな！　さすが私！」
「この魚に人を見る目はないようですね。……ってわあほんとに飛び込んできやがった！　いっそキモいよ！！」
「……だよなー」

結局一匹もすくえずに紙を破いたくせして、太子の引き寄せたおわんにはなぜか魚がてんこ盛りになっていた。
魚の方から飛び込んでくるのだからしょうがない。……
…いや、しょうがないのか、これは？
キモい。実に気持ちが悪い。
お店の人も呆然として道行く人も呆然として、一時期変な人だかりを作ってしまった。
引きつった笑いを浮かべる僕のとなりで、太子も困ったよ

うに笑っていた。

「でも、一匹もらえてよかったですね」

「うん、あの人やさしかったな」

透明な袋に水と金魚が入っていて、太子が左手にぶら下げている。

赤くて小さなその魚を気遣ってか太子が走り回らなくなったので僕としてはほっとしている。

「射的だってさ！　ちょっとお前ぶちのめして来い」

「え、っと、これってそういうゲームですか」

違うよ違う、と店の人に笑われてしまった。

どうやらそんな物騒な遊びではなく、弾を撃ち出すおもちゃで的の景品を倒すともらえるというものらしい。

なんだかギャンブル要素の高い遊びばかりだ、この縁日というものは。

「たまにやるから面白いんだろ。基本運試しだと思うよあと腕試し。ほれほれ妹子やらんかい。あの右っかわのネコのお面が欲しいでおま！」

「……ああ、あれネコだったんだ」

まあ一度くらい僕も遊ぶか、とポケットに手を突っ込んでようやく気付く。

「あ、財布忘れてきたみたいです。できません。すいません」

「何だとこのお芋め！　ってそうか、しょうがないか」

「？」

ふむふむとなにか納得したような様子を見せる太子。なんだ突然この人は。

にっと笑って太子が言った。

「しょうがない、いつも仕事がんばってる小野君のために今日は何でもおごってやろう！」

「ありがとうございます。……小野君言うな気持ち悪い」

「なんで！？」

呼び捨ての方がいいとはマニアックな、とかなんとか太子が言っていた。そういえばそうだなとか思いながら、きっとこれは慣れのせいだと結論付けた。

今さら丁寧な呼ばれ方をされても何だか距離があるようで

気に入らない。
だいたい僕が仕事忙しいのはあんたがサボるからですよと言ってやったら変な顔をされた。

「じゃあこいつに射撃一回で」
「あいよー」

太子がお金を払って、かわりにおもちゃと弾を5つ渡された。

「……手、放しましょうよ、不便です」
「片手で充分だろう、優秀な小野君」

にやにやと笑われてカチンと来た。
弾は太子がつめてくれた。金魚と水入りの袋をぶら下げたまま片手で器用にてきぱきと。
その様を見せられて笑われては僕も後には引けない。

「……ムカつく」

見てろよ、と内心呟き、おんなじ様なにやけ顔のどうやらネコらしいお面に狙いを定めて腕を伸ばす。

「本当に取るとは思わなかった。5発目でとか、お前役者だな」

別に盛り上がりとかを計算したわけではない。自分でもちょっとどうかと思うくらい熱くなったし緊張したし。
そんな大人げないところは知られたくなかったので余裕ですよという表情をして何も言わなかった。
困ったときは何も言わないに限る。

その後もぶらぶらと店を二人で冷やかしてまわった。
輪投げとか、かたぬきとか、ヒモ引きとか。
遊ぶたびに景品をもらえたりもらえなかったりで一時期太子の見た目がかなり奇抜だった。手を繋いでいるのが恥ずかしいくらいに。
持ちきれなくなったものを僕もつけさせられたので一時期僕らの周りを人が避けて通るという、歩きやすいんだけど不名誉な自体も発生したりした。不服だ。
でも子供には大人気で、いくつもあった景品のほとんどを太子は子供にあげてしまった。

「よかったんですか？」
「ん？　別に、いいさ」

喜んでもらえたしと太子が笑って、僕は僕で身軽になったことにほっとしていた。
結局手元には太子の取った魚と、僕の取ったにやけ面のネコのお面しか残らなかった。そのネコのお面は太子が頭に斜めにかけている。っていうか冠に引っかかってるんですけど。

「お囃子が聞こえるな」

道の真ん中で太子が立ち止まって僕も立ち止まる。
後ろを歩いてた人が迷惑そうに避けていくのを見て何となく頭を下げた。

「この辺でちょっと休憩するか」

太子は構わずに近くの店に向かう。

「イチゴシロップでひとつ！　大盛りで！」

出てきたのはこんもりと盛られた白い山の上が赤いピンクな物体だった。

「……なんですかこれ」
「溶けちゃうから早くしないとな。あ、あの木の陰にでも行こうか」

僕の質問を軽く無視して太子が僕の手を引く。
今日初めて縁日の通りから僕らは外れた。

「ひゃっこーい！」
「うっ……」
「あ、お前あれだろ、頭が痛いんだろ」
「わかってたんなら先に言え！」

白い山の正体は氷だとかなんだとか。
赤いピンクの液体の正体は砂糖だとか何とか。
びっくりするほど甘くてびっくりするほど冷たくて、なるほど、確かに夏にはぴったりな食べ物みたいだ。
ただしこの頭痛はどうにかならないものか。思わず頭を抱えてしまう。

「一気に食べるからだ、この食いしん坊め」
「うっさい……」

僕らは道から外れた木陰で座り込んでいた。日差しから逃れられればやはり涼しくて過ごしやすい。
ちなみに相変わらず手は繋いだままだ。この人は頑なに何を恐れているんだろう？　今さら僕が逃げ出して帰るとでも思ってるんだろうか？
相変わらずこの人の考えは読めない。
おかげで僕が器を持つ係、太子がすくって食べさせる係、みたいなおかしなことになっている。
食いしん坊って、がんがん僕の口に放り込んできたのはどこのどいつだ。
恨みがましい視線を送ったら口笛交じりに目を逸らされた。ああやっぱりこいつわざとか。許さん。

「でもこうやってお前と、遊ぶのも久しぶりだよな」

殴ろうと拳を構えた僕を見もしないで太子がそんなことを言った。

「まあ、……そう言えばそうですね」

そういえば……最近やたらと忙しかったような。
何となくそんな気じゃなくなって拳をおろした。ポケットの固い感触に触れた。
折りたたんでしまったままの手紙だった。
だから、これを書いたんだろうか。
会いたいと思ってくれたんだろうか。
僕に。

「ほら妹子、あーん」
「……恥ずかしいんでやめてください」

眩暈がしたから抗議して、素直に口をあければ放り込まれる冷たさ。
お前舌真っ赤だなと太子が舌を突き出して笑った。私のほうが真っ赤だろ、とよくわからない部分で張り合ってくる。
ぐ、と眉間にしわを寄せて、同時に悪戯してやりたくなって体を寄せた。
顔を近づけてその舌先に舌を這わせる。
どうしようもなく甘い。そして冷たい。
ひやりとしてるのに頭に血が上る感覚がある。
太子が目を見開いて、舌が逃げる。追ってもっと近寄る。
持っていた器をそのへんにおいて、頭を抱いて引き寄せた。
ネコのお面がちょっとだけ邪魔だ。
唇を合わせる。軽く食んで、薄く開かれたその中に入る。
縮こまる舌を吸い上げてすり合わせる。
甘くてひやりとしていて心地好い。

「……ふ」
「……あもう、何だお前突然に。あもうこぼれてる

じゃないかもったいない」
「すみません」
「いや、謝れって言ってるわけじゃないけどさ……」
「……もっと、いいですか」
「わっ……」
ぺろりと口元を舐めて、額をあわせたまま言った。
うっすらと赤くなる頬とか、目元とか、そらされる視線とかに煽られる。
ここが外だということを忘れた。
「……少しだけだからな」
手を繋いだままだった。そこと、唇とが熱かった。
太子が僕の背中に腕を回す。
軽く当たったやわらかい感触はきっと魚の泳ぐ透明な袋。
ぴちゃ、と聞こえた水音に、その魚が跳ねる様子を連想した。
唇を合わせてお互いの熱を交換し合って。
それだけだ。
それだけなのに体の芯からどろどろに溶けていきそうな程の、多幸感。
なんでだろうと思う間もなく波にさらわれる。
なんだか泣き出しそうなんだと、思った。
ああもうべたべたじゃないかと、ようやく満足して口を離したときに太子が言った。困って笑ってた。
ぐしぐしと袖で口元をこすられた。太子は自分の口の周りも同じようにこすっていた。
手を繋いで道に戻る。
相変わらず太子ははしゃぎっぱなしで、僕は何だか少しだけぼうっとしていた。
疲れたのかもしれない。太子のテンションに付き合って。
日もだいぶ傾いていた。
太子の興味を示すものが遊びから食べ物に移っていた。
綿菓子とかいう甘いものに、たこ焼きに、りんごアメに、クレープに焼きそばに。
何だかおなかいっぱいの僕の代わりにばくばくとおいしそうに太子が平らげていった。
「そろそろ帰った方がいいのかな」

僕を見て太子がそう呟いた。
何だか疲れてひどく眠たかった。
だから太子がどこかさみしそうだとわかったのに、気付いたのに、何もできない。
ほら、ちゃんと自分で歩けよといわれて手を引かれる。
どうしても重たい瞼をこすりながら太子に連れられて歩いた。
何だか僕の方が子供みたいで、少しだけおかしかった。
何かがさみしかった。

「ここまで来ればもう、大丈夫だろ。自分で帰れるだろ？昼だって一人でここまで来れたんだしな」
「太子は？」
「私は最後までいるよ」
「じゃあ」
「でもお前はもう、帰りな」

やさしい口調なのに、有無を言わさぬ響きだった。
繋いだままの左手と右手、もう片方も、太子が握る。
「な、私、今日お前と遊べてうれしかったよ。楽しかった。だからもう、妹子は帰りな」

なんでだろう、太子の言葉の中に別れを感じた。
さよならなんかよりもっともっと重たいもの。
引き止めたくて、それなのに何を言えばいいか分からない。

「太子の、次の休みはいつですか？」
「え？」
「今日は、いろいろおごってもらったんで、今度僕がカレー作ってあげますよ」

何だか祈るような気持ちだった。
すがりつくような気持ちで太子の返事を待って、でも、太子はゆるりと首を横に振った。

「次はもう、ないよ。……いや、それはちょっと違うか」

太子がわずかに首をかしげた。
その向こうに夕日が見える。
熟れた果物みたいな赤色が大きくて、半分以上隠れてしまっている。
明るいのに暗くて太子の表情がよく見えない。
それでも笑っているのはわかった。

「妹子、私、お前のことずっと見てるからな。だから、とにかく頑張れよ。縁があったらまた会える、なくても私が作るから。だからその分、お前も頑張れ」

右手が解かれた。
ぐい、と魚の泳ぐ袋を手渡される。

「これ、やるよ」

影の中で、いつものように満面に、笑って。

「じゃあな！」

次に左手が解かれて。
ぐらり、とひどい眩暈を感じて僕は立っていられなくなる。
本当は引き止めたい、僕の手を離して、くるりと、背を向けようとしているその人の腕を掴んで引き止めたいのに。
膝から崩れ落ちる。
立っていられない。

走り去る足音を聞いた。
倒れこんでもう見えていないはずなのに、お面を斜めにかけて縁日の人ごみの中に駆け戻り、最後に一度だけ振り返って僕に手を振る姿を見た様な気がした。

いろんな違和感とか疑問とか、今まで忘れていられたことを突然思い出す。
手紙なんていつもらった。
最後に太子に会ったのは、いつだった？
頑なに手を繋いでいようとした、その意味は？

気がつけばあたりは暗かった。
倒れこんでいた体を起こす。
右手に何かを握っている。
赤く弾ける花びらの形が魚のひれに似て、あの赤くて小さな魚を思い出させた。

ずっと前に一度だけ聞いた、太子の話を思い出す。
夏に行われるという霊祭。供養、お迎え、見送り。火をたいて。

また会える。今年も、来年も、その次も。
そのための日。
夏の。

「……今日は、」

座り込んで、呆然と呟く。

「お盆だって……」

祭囃子が微かに聞こえた気がして、駆け出した。

縁日。金魚すくい。手を繋いで、射的とか。何だよそれ、ネコって、言われなきゃわかんないだろ。にやけた面がムカつきますよ。
カレーを作ってやるって言ったのに。僕の方から言い出すなんて珍しいことなのに。今さら悔やんだって知るもんか。
りんごアメ。赤くて、やっぱり舌を突き出して自慢してきた。
たこ焼きは一つ分けてもらった。
クレープで中身をこぼして、綿菓子で手をべたべたにして。
かき氷なんて、ここにはないんだ。
氷の山にシロップをかける。
舌先の甘さと冷たさを忘れない。

川が流れていたから、手にした花を投げ入れた。
魚は川を泳ぐものだと思った。
はしゃいだ顔を思い出して泣けてきた。

「……今日だけだ」

袖がないから涙をぬぐえない。
せめて手ぬぐいでも持つべきだった。
ポケットにはもう、何も入っていない。

「今日だけ、明日からまた笑うから」

うずくまりたかったけどそれだけは我慢する。
この場からもう二度と動けだせないような気がした。

「頑張るから」

今日は夏祭りで、夜には踊りがあって、だからきっと太子は今は僕を見ていない。
明日からはまた笑おうと決めて、だからこの夜だけはとひたすらに涙をこぼした。

「酒と肴とほおずきと」

2009/08/31

何気なく家に行ってみたら、縁側に人がいて思わず荷物を取り落としてしまった。

「あれ、曽良君じゃない」

お久しぶりい、とのんきに笑うその人の側まで詰め寄って、でもすんでで言葉が出ない。

僕の剣幕に怯えたのかびくりと芭蕉さんが肩を震わして身を縮めた。

その様子を見ていると何だか毒気が抜かれてしまう。

いつのまにか苛立ちもかき消えていた。

「……お久しぶりです」

自然に、気の抜けたような笑みが出た。

ぽかんと芭蕉さんが僕を見て、それからうれしそうに、笑った。

「ほおずききれいだよねー」

芭蕉さんが何をしていたかと言うと、ただ縁側でのんびりと、ほおずきを愛でていただけらしい。

「この袋感がたまらないよね。ねえね曽良君知ってる？　皮丁寧にむいてー、そしたら中にまあるいきれいな実があるでしょ？　それを丁寧にもみこんで、丁寧に丁寧に中身を出していってさ、笛作るの」

「知ってますよ」

あれ私好きなんだよね、と笑って芭蕉さんがくるくるとほおずきを回していた。

「じゃあ、やったらどうですか？」

「え？」

「その間に僕は、家の掃除をしますから」

あんたほったらかしにしてたでしょう、埃っぽいんですよ、家が。
ただでさえ臭いんだからせめて清潔にしといてください。
言うと、怒りながらも仕方ないじゃないかと唇を尖らせていた。
おっさんがやってもかわいくないし苛立ちを煽られる表情だなと思った。
ついでに接吻がしやすそうだなと思ってしておいた。
芭蕉さんが硬直して動きを止めた。

「じゃあ、せめて大人しくしといてください」

縁側を後にし、玄関に回ろうとしたら荷物を落としっぱなしだったことにようやく気付いた。
落ち着け、動揺しすぎだ自分。
たかが芭蕉さん相手に何を。
いらいらと振り返って縁側を見たら、芭蕉さんが同じ姿勢で固まっていた。
まあ、静かで大人しいのはいいことだ。
僕は家に入って掃除の支度を始める。
あらかたの掃き掃除とふき掃除を終わらせた。
掃除はわりと好きな方だ。無心で体を動かしていれば気持ちがいいし、その結果きれいになるのも気分がいい。
何となく布団まで干してしまったのはやりすぎだったかもしれない。でも代わりに押入れの掃除ができたからいいかと思い直した。押入れの掃除まですることはなかったかもしれない。まあ時間があったからいいかと思うことにした。

「あー、それ、懐かしいなー」
「なんですか？」
「うっふっふ、ひみつ！」
「捨ててきます」
「振りかぶんないで！　不法投棄反対！」

芭蕉さんにしがみつかれて鬱陶しかったので、芭蕉さんごとその箱を畳の上に放り投げた。
腰を打ったのか芭蕉さんが悶絶していた。

「きみ、君ねえ……っ！」
「そろそろ日が陰るんで布団取り込んできます」
「少しは私に関心持って！」

ぎゃーぎゃーと背後でうるさい声を黙殺する。
何を言ってるんだ、あの人は。

「関心持たなかった日なんか、あるもんか」

あの人は何もわかっていない。

舌打ちをして、庭の布団を担ぎ上げた。

ちなみに箱の中身はガラクタだか何だかわからないもので、でもそれを芭蕉さんは宝物だと言い張ったのでもう放っておいた。

「さっそく布団に潜り込むのやめてください」

「だってせっかくあったかぽかぽかだから……」

布団は後で押入れにしまおうと思い、縁側にたたんで置いておいたら、いつの間にか部屋の隅にひかれてそこで芭蕉さんが丸くなっていた。

「あ、何なにもしかして曽良君もいっしょに寝たい？　うらやましい？」

「着物ひん剥きますよエロジジイが」

「この際エロいのは君のほうじゃないの！　なんでそんな発想になるの！？」

側に寄り、屈みこんで顔の両脇に手をついた。

びくり、と芭蕉さんが布団を掴んで目をつむった。

その表情をじっと観察する。

何かを待っている。その何か、がわかっていても僕は動かない。

ぐ、とつむった目を芭蕉さんがおそるおそる開く。

「馬鹿ですね」

鼻で笑って、芭蕉さんから離れた。

呆気に取られたような顔の芭蕉さんが一気に赤くなって、何事かをわめいている。

そのすべて無視して僕は台所へ向かった。

僕がここに持ってきた荷物は酒、野菜に果物。

酒瓶が落とした拍子に割れていなくて良かった。

猪口や小鉢を用意して洗っておく。

きゅうりやなすを切ったり、果物をむいたり適当に煮物を作ったりする。

「と、いうわけで酒盛りです」

「どういうわけか私さっぱりわかんなかったけど」

まあいいや、お酒好き、と笑って芭蕉さんがお猪口を傾ける。

そうですか、と心底どうでも良さそうに返して、僕も酒を飲んだ。

唇を舐めて、酒精の甘さが鼻に抜けた。

「いい夜ですね、芭蕉さん」

「だねー、思わず何か詠めそうなくらい」

言いながら俳句を作る気は微塵もない。そうあからさまにわかる酔った口調で笑われてため息を吐いた。残りを一気に飲み干せば、すかさず芭蕉さんが酌をしてくれる。

芭蕉さんのも空になっていることに気付き、遅れて僕も芭蕉さんの猪口に酒を注いだ。

「ありがと」

美味しいおいしいと笑う芭蕉さんを見ていたら急に肺の奥が痛んだ。どうやら僕も酔ってきたらしい。

どうせだからとその酔いのままに、ずりずりと畳の上を移動して芭蕉さんのすぐとなりに寄った。

「んう？」

目元が赤い。目つきがとろりと、眠たげだ。

煮物の器からそのまま手づかみで食べて、指先を舐めている。

「酔ったの？」

へらりと笑う。情けなく、やさしく、おだやかに。

酔ってなくてもこの人の笑い方はいつもそうだった。

猪口の中身を空にして手放し、僕は頭をあんたの肩に乗せる。

「酔ってる」

悪い子、と笑われる。悪い子って何がだ、あんたよりも僕の方がよっぽど良い子だ、と何だか芭蕉さんレベルに頭の悪いことを考えた。

体温はどうやら僕のほうが高くて、頬を押し付けた部分の衣の感触が心地いい。

「曽良君の料理は美味しいね」

当たり前だ、と胸の内だけで返して、目を閉じた。

平衡感覚がおかしくて、目を開けると僕は寝転んでいた。頭の下がやわらかいのかかたいのか判断に迷う感触。

「起きた？」

寝ててもいいんだよ、と芭蕉さんが言う。芭蕉さんはまだ飲んでいる。僕の頭を膝に乗せて、一人で酌して、猪口を傾けて。

「せっかく用意した酒なんですが」

言外に僕にも残しておけと含ませるけど、通じている節はなかった。

何まだ飲みたいの、でももう曽良君限界でしょう。あそうだ、桃あるよ、桃。

「……だからどうした」

「食べる？」

「……じゃあ、いただきます」

芭蕉さんの指につままれた桃を見たら喉が渇いた。素直に口を開き、そこに白い果実が添えられる。

余計に喉が渇くような甘さだった。

「美味しい？」

「……やっぱり、酒を飲みたいですね」

甘い汁を付けたままの指先が僕の唇をなぞる。

見上げる表情は悪戯をしようとしているような、何かを待ちわびているような、悪ガキの顔だ。

舌を伸ばしてその指の甘さを舐めた。

そのまま調子に乗って指を口の中に入れ、中をいじってくるものだから噛みついてやった。

ぎゃ、と短い悲鳴が上がる。

「暴力反対！」

「人の口の中を弄繰り回すのも一種の暴力だと思いましたが」

噛まれた部分をしげしげと眺めて、芭蕉さんが息を吹きかける。火傷じゃないんだぞ。

僕は起き上がろうとしたけど何だか体に力が入らなかった。少し持ち上げた頭がそのまま膝の上に戻る。

「酔ってるんだから」

無理しないの、と笑われた。芭蕉さんはまた酒を舐める。

その様子をじとっと見上げていたら、何かをひらめいたように芭蕉さんがまた笑う。

「飲ませてあげようか？」

何をしようとしているのかすぐにわかった。
だいぶ前からわかってた。
そうして欲しかったからだ。

芭蕉さんが一口酒を含む。
身を屈めて、足りない距離の分片手で抱き上げられて、頭を上げさせられて、口付けられた。
唇を薄く開けて待つと、冷たいものが流し込まれる。
そのまま喉に流れ込み熱を生んだ。
唇はすぐに離れて、再び酒を含む。
芭蕉さんが屈みこんで、流し込まれて。
何回か繰り返されて。

いい加減もどかしくなって、離れていこうとする前に首に腕を回して抱き寄せた。
びっくりしたように見開かれる目がすぐに満足げに細められる。
誘われたのだと遅れて気付いた。

そのまま酒の甘さを分け合って、ゆるゆると眠気が這い上がってくる。
こんな状況でおかしいと思いながらも抗いがたくて、目を閉じる。

ゆっくりと、腕から力が抜けていくのを感じた。
遠のく意識で舌先にのせられる甘みとやわらかさを必死で追った。

寒気を感じて目を開いた。
体を起こし、鈍く重たい頭を振る。
くらくらした。
外は真っ暗で一瞬ここがどこだかわからない。

酒は一杯だけ残されていた。
猪口に注がれたままで置かれていた。
つまみはもう残ってはいない。
きゅうりとなすも消えていてため息を吐いた。
大食らいめ、と呟いて、側に残されていた書置きに笑った。
書置きは芭蕉さんの字でこう綴られている。

お酒も煮物も美味しかったよ。
また来年もできたら行くからよろしく。ちゃんと師匠をもてなすんだぞ！

追伸、一句できた！
桃ってお尻に　似てる
芭蕉

相変わらず下らない、俳句とも言えないものを詠んでくれる。
変わらない。あんたはまったく変わらない。
そのことが何よりも、僕は、うれしいのかもしれない。

「次来るときには、せめて一句詠めるようになってから来てください」

またあの人は簡単に十七字のルールも忘れる。
でもきっと誰も突っ込んでやらないから、芭蕉さんのスランプは来年までこのままだ。

次会った時にはまずそこを指摘してやろうと、それまで忘れないようにしようと思い、一息に酒を飲んだ。
喉で熱を生む甘さに酔った心地で、高揚した妙に清々しい気分で笑った。

「嘘と退屈と夏祭り」

2009/08/31

「はーい、俺も、俺もー！　あの世に遊びに行きたいでーす！」
「黙れ！」
「ギャーッ！！」
瞬時に伸ばした爪を脳天に貫通させておいた。何をほざく、このバカは。
痛い、痛い、と悶えるその人の血で机の上の書類が汚れてがっくりきた。
腹いせに爪をゆすると大王は余計に痛みで悶えていた。いい気味だ。
「はー、どうするんですかこれ、読めませんよもう」
「え、俺のせい？　鬼男君のせいじゃなくて？」
「どう見てもアンタのせいだ、アンタの血だろ」
「そんな……」
があん、と大げさに頬に両手を当てて、いやいやと体をくねらせるこの男。どこで覚えてきたその仕草。心底気持ち悪くて心底げんなりした。
この人はどこまで僕に精神的ダメージを与えれば気が済むのだろうか。ため息が止まらない。
大王の頭の傷口はもう既にふさがっていたりするから余計うんざりする。本当は血を止めることだってできただろうに。というかいつもはいちいち流さないくせに。コイツわざとやりやがったな。
思い当たって、やっぱりため息を吐いた。
「今日、だけですよ。今日遊びに行ったら絶対に、ぜえーったいに！　明日には帰ってきてこの続きをするんですよわかりましたか！！」
「わわわ、わかったわかった、そんなに顔近づけないで！」
第一この人が本気になったら僕なんかでは太刀打ちできないのだ。何て嫌な上下関係。僕の顔色をうかがう素振りをしながらも、いざとなればさっさと出かけていくのだコイツは。何て性質の悪い上司。
だったら逃げられることに苛立ち、いつ帰ってくるかとやきもきするよりは、はじめから約束を取り付け認めてしまった方がよっぽど精神衛生的にはいい。

何を隠そうこの男、こんな様子でありながら閻魔大王であらせられるので、仕事をサボりはすれど嘘は吐かないのである。今のところな。

僕の穏やかな生活の半分以上はあきらめでできているのである、悲しいことに。

そうと決まれば、と大王は浮かれた足取りで席を立つ。残された血で汚れた書類と、終わらず積み上げられたままの書類の山を見て僕は肩を落とす。

どうしたものか、この書類。やり直さなければ。

あとは書類の山も。少しでも効率を上げるために仕分けでもしておくべきだろうか？

最終的にこれを処理できるのは大王だけなので、僕がいくら頑張ったところで片付かない仕事であるということがやる気をゴリゴリと磨耗させる。

どうしたものか。

「あれー、鬼男君、行かないの」

しかも扉のところであのバカが何か言ってますよ。何言ってんでしょうね。せめて僕にわかる言葉で話してくれませんでしょうかね？

「鬼男君も、行こうよ。だってどうせそれ、君だけじゃどうにもならないでしょ？」

コイツわかっていやがった。こめかみあたりの血管がぶち切れそうになったんだけど、こういうのって労災おりるのだろうか。というかこのストレスに対して迅速かつ手厚い保障を僕は要求したい。あと職場環境改善、もっと言うなら上司改善。

「それにほら、俺一人だと迷って帰って来れないかも」

そんな、冗談にもならないことを言う。

アンタにできないことなんてないくせに。

迷う？　出来るもんならやってみろって言うんだ。

わからないことなんか何一つないくせに。

すべてを知ってしまって、いつだって退屈しているくせに。

仕方ないなと呟いた。

「付き合ってやりますよ、感謝しろこのイカやろう」

「お祭りで縁日で屋台かなー。なに鬼男君イカ焼き食べたいの？　それとも食べたいのは俺の方？　やっだー、こんな明るいうちから！」

「頚動脈と大腿動脈と手首とスタンダードに脳みそと、どこがいいか一秒やるから選べ」

「やけにピンポイントかつ致命傷になりそうだからどこもイ

ヤ！　や、爪しまってごめんなさい！」

手首を掴んだ、ひええ、と色気のない悲鳴。

聞き流して、引っ張って部屋を出た。

「それと大王、顕界はあの世でなくてこの世です」

「やだな、俺からしたらこの世がここで川の向こうがあの世で」

「だから他の人と話通じないんですよ。まわりに合わせてくださいよ」

「えーやだ。鬼男君が通訳してくれればいいじゃん」

「めんどくさいヤツだな！」

でもこいつがめんどくさいヤツでなければこんなことにはならないのだろう。

二人そろって仕事を放り出し、遊びに行くなんて。

あの世もいいけど、ほら川越えてすぐのところ、あそこでも夏祭りやってたよね、そこでもいいなあ。

うっとりととなりで大王が微笑んだ。

この人は魂が好きなのだ。他人事みたいに言いながら、川向こうの祭りだって始めたのはこの人だと聞いたことがある。

今では霊の中でも恒例行事みたくなっているから、大王は関わっていないらしいが。

大勢の魂を集めるためにわざわざそんなイベントを用意する、その労力は怠らないくせに仕事は良くサボる。

そのバランス感覚は僕にはまだ理解できなくて振り回されっぱなしで、でも退屈じゃないから、これでいいかと納得してしまいそうな自分がいる。

ほだされてはいけない、厳しくしないと、とは思いつつもうすでに甘やかしてしまっている。

僕も早く、うまくバランスが取れるようになりたいと思いながら、となりでやたらと楽しげにしゃべる人に適当に頷いた。